

100年目の節目を迎える 大井川鐵道

静岡

大井川鐵道は1925(大正14)年3月10日に産声をあげ、2025(令和7)年、創立から100年という節目の年を迎えます。

設立目的は、大井川上流部の豊かな森林資源の木材運搬と、水力発電所やダムを築くための資材輸送でした。開通前までは、川の流れを利用した「川狩り」や索道、人力や馬力を使った輸送方法であったため、木材や建設資材の輸送力という点では非常に乏しいものとなっていました。そこで登場したのが鉄道です。より多くの木材を上流部から下流部へ出荷したい、発電所やダムの建設により多くの電力供給をしたいといった地域の要望を満たすため鉄道建設の気運が高まっていったのです。こうして、1927(昭和2)年大井川本線(金谷駅～横岡駅)で蒸気機関車(SL)による運輸営業を開始しました。

その後、増大する貨物輸送に対応するべく1949(昭和24)年に金谷駅～千頭駅の電化へと踏み切り、SLを使つての列車運転に終止符が打たれます。電化後、しばらくの間は好調でしたが、1960年代後半からは、木材やダム建設の需要の減少、地域住民の過疎化、自動車化(モータリゼーション)の進展など、厳しい経営環境が訪れます。そこで、新たな時代に対応するべく方向転換をする道を選びました。貨物輸送や日常生活利用者から観光利用者をメイン

ターゲットにシフトしたのです。当時、動力近代化の名のもとにSLの用途廃止が進められていく中、自らの路線の維持とSL運転という鉄道文化の伝承を目的に1970(昭和45)年に千頭駅～川根両国駅の1.1キロにおいて小型SLを使つた観光列車の運行を開始し、大きな話題となりました。この反響の大きさに手ごたえを感じた関係者は、より長距離路線への拡大を目指し、1976(昭和51)年には金谷駅～千頭駅の39.5キロで風格漂うSL列車「SL急行 かわね路号」の運行をスタートしました。以来、SL列車は大井川鐵道の代名詞となり、2026(令和8)年には大井川本線運行開始50年の節目を迎えます。

時が経ち、新たな風を吹き込むため2014(平成26)年に、本物の蒸気機関車を使いアニメーションや絵本の世界から飛び出してきたような世界観を演出する「きかんしゃトーマス号」を導入しました。この画期的な取り組みによって、利用客層が比較的年配の方々から3～4歳の子供をもつ30～40歳台のファミリー層へと変わっていきました。

これからも大井川鐵道は、「SL急行 かわね路号」や「きかんしゃトーマス号」といった個性的で観光的な色彩に富んだ列車を走らせ、乗車する方々に笑顔を届けていきます。節目の100年を迎える大井川鐵道に是非みなさんも足を運んでみませんか。



復活運転初日の「SL急行 かわね路号」(1976年)



大井川鐵道を駆け抜ける「きかんしゃトーマス号」とバスの「パーティー」

©2025 Gullane (Thomas) Limited.